

## シャルトル大聖堂《 Baie48: 黙示録著者聖ヨハネ伝窓 》の独創性

高野禎子(清泉女子大学)

英仏中世のゴシック聖堂におけるステンドグラスの主題は、キリスト伝や聖母伝をはじめ聖人伝図像など極めて多彩である。本発表では、そうした聖人伝の一つに数えられる「黙示録著者としての」聖ヨハネ伝の窓に注目し、特に最古の作例と考えられるシャルトル大聖堂の窓《Baie48》の特徴と意義について考察する。

シャルトルの窓《Baie48》は、慣例的に「福音書記者聖ヨハネ伝の窓」と呼ばれているが、窓の細部を見ると、聖ヨハネは福音書記者としてではなく、黙示録の著者として描かれている。周知のとおり、初期キリスト教時代から福音書記者のヨハネは12使徒の一人でもあり、かつまた「ヨハネ黙示録」の著者のヨハネと同一視されてきた。それ故シャルトルの窓《Baie48》の通称はやむを得ぬことでもあろうが、本発表では黙示録著者である点を重視したい。

発表者は、2006年の夏から英仏両国に残る同主題の窓の実態と分布状況について継続して調査を行っているが、2018年1月の時点で、断片的なものも含めて計18例を数えるに至っている。特に初期の作例でほぼ完全なサイクルとして残るのは、シャルトル大聖堂の窓《Baie48》であり、その他同時期～10年後とされるブルジュ大聖堂の窓《Baie22》、トゥール大聖堂の窓《Baie3》も特筆に値する。これらの窓の場面総数は10～17で、共通する主題として「パトモス島のヨハネ」、「薪を黄金に変える奇跡」、「毒杯の奇跡」、「ヨハネのミサ、栄光の死」等がある。その他固有の主題も登場する。発表ではこうした初期の作例と照らし合わせながら、シャルトルの窓《Baie48》の特徴を整理した上で、先行研究として故三浦アンナ氏をはじめコレット・マネス・デランブル、クローディヌ・ローティエ両氏らの近年の研究成果も参考にして、以下の三つの新たな視点から検討を行う。

① 哲学者クラトンと宝石の奇跡譚

② 隣接する窓《Baie46: 聖マグダラのマリア伝》との関連性

③ シャルトル大聖堂における黙示録著者としての聖ヨハネの位置

特に②の《聖マグダラのマリア伝》が何故に《黙示録著者聖ヨハネ伝》の窓の隣りに配置されたのかという問題については、《Baie30a: 美しき絵ガラスの聖母》の窓の下部に、1194年の大火災後に挿入された「カナの婚礼」の主題との関連から検証したい。

以上、各視点からの考察を踏まえて、シャルトルの窓の独創性を浮かび上がらせることができるであろう。結果的に、福音書記者と黙示録著者が同一視されていた13世紀初頭の時代背景と、黙示録における「天上のエルサレム」の具現化というステンドグラス全体の創作動機に関して、ある程度説得力のある仮説を提示できればと考えている。